

【准看護学院第50期生 戴帽式】

自衛隊札幌病院准看護学院（学院長 本間1佐）は、令和7年10月2日（木）准看護学院第50期生28名（男性16名、女性12名）の戴帽式を挙行了。式には、北部方面総監部より医務官、最先任上級曹長、人事課長、訓練課長、方面直轄部隊から北部方面衛生隊長のご臨席を賜り、厳かな雰囲気の中、緊張の面持ちの学生一人一人に教務班長（星1尉）からナースキャップが授けられた。ナースキャップを戴帽し、新たなステップへ歩を進めた学生は、力強い眼差しで衛生科精神を唱和し、改めて衛生科隊員として「骨肉の至情と挺身奉仕の精神」を胸に刻んだ。

病院長は、戴帽式を迎えた第50期生に対して、「この春、入校式で贈った哲学者プラトンの言葉『優しくありなさい。あなたの出会う人は皆、困難な戦いに挑んでいるのだから』を実践している？」と訊ね、「医療そして看護は単に病気を診るだけでなく、病気になった人、その周囲の人々を取り巻く様々な問題に寄り添うことが必要である。これから始まる臨床実習では、教科書で得ることのできない知識・経験を積み、患者を人として大切に思うことを学び、准看護師への道を、そして衛生救護陸曹としての道を一步一步進んでほしい。」と要望した。そして、戴帽式を迎えた学生に贈る言葉として、「看護とは、患者が生きるよう援助することであり、それは実際的かつ科学的な、系統だった訓練を必要とするアートである。」というナイチンゲールの言葉を引用し、「この言葉は、抽象的な概念であり、看護や芸術の価値をどのように捉えるか、例えば『絵』を鑑賞して、良い絵か悪い絵か、『音楽』を聴いて素晴らしいか否か、見た人・聴いた人の捉え方が重要であり、看護の価値も同様に、それを受ける患者や家族がどのように思うかが重要となり、その評価は看護を受ける患者や家族の心の中にあるということである。『看護は芸術である。』、これから看護の道を志すものとして、この芸術を学び、基本的な看護技術や知識の習得は勿論大切だが、患者やその家族の心の中に自分の価値を見出す大切さを学び、患者を取り巻く様々な問題に寄り添える、優しい、思いやりのある准看護師・衛生救護陸曹に成長することを心より期待する。」と、これから新たなステージに臨む第50期生へ期待を込めて祝辞を贈った。

本戴帽式により、学生一人一人が、看護に対する理解を深め、看護実習に臨む気概を堅持した。



教務班長（星1尉）よりナースキャップを戴く



自衛隊札幌病院長（森陸将）



准看護学院長（本間 1 佐）



厳肅な面持ちの50期生



真剣な眼差しで祝辞を謹聴する学生



決意を新たに衛生科精神を唱和



学院長、教官・助教、49期生との記念撮影